慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ブーフホルツ 正価とは何か : Friedrich Buchholz Was ist ein gerechter Preis?
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.3 (1941. 3) ,p.417(155)- 423(161)
JaLC DOI	10.14991/001.19410301-0155
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410301-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E・B・ディートリッヒ著「アメリカの極東貿易」

「上記の諸原則は單純に響くかも知れないが、極東貿易の實狀を檢討して見ると、これらすらも現實の行動において又精神において、屢々守られなかつたのである。先進國の利益のために、（後進國の）工業化を遲らせる努力が行はれた。他國民の利益のために、ことに日本に對して、自然の市場が閉鎖せられた。貿易政策は双方の通商利益を考慮せずに、一方的に樹立せられた。諸條約は諸列強の利益のために、無視せられた。（したがつて）上記原則の一部を適用するだけでも、植民母國側に對して、特權的地位の犧牲を强ふる事にならう。又脆弱な或は利己的な國內工業は打擊を蒙らう。それから從來支那に對して課せられ來つた法律上、經濟上の諸權益は徹廢される事となる。最後に、日本の輸出品に對して適當な捌口を與へる事は、その特殊の緊切な要求からして、現實に解決さるべき必要がある。

いづれにしても東洋からの收奪の時代は終つたのである。現在ではすべての東洋諸國において　國家的統制が極度に進展し、東洋市場が自由に開放される事も、望み少くなつたと見られる、若しもそれらが公平に開放され、且つその對外貿易統制が健全なる政策の上に樹立されるならば、極東との貿易は以前より一層安定化し、公正なものとならう。太平洋貿易の新發足に對する定則を見出す事は、決して簡單容易な業ではないが、しかもそれは最近の通商外交に對して、敢然たる挑戰を意味するものである。」

ブーフホルツ「正價とは何か」

——Friedrich Buchholz „Was ist ein gerechter Preis?"——

氣賀健三

近頃我國に於ては正價論が問題となつて來て居る。統制經濟の時世に於て、政府が市場の價格機構に干涉するに連れて、商品の價格をどうして定めようかと先づ考へざるを得ない。又政府が或方針に從つて定めた公定價格に對しては色々な方面から是非の議論が起つて來る。蓋し經濟が政治化された當然の現象である。實際社會の斯樣な變化に應じて經濟學の內部にも亦變化が起る。即ち經濟學の中に經濟政策的要素が浸潤し、理解する經濟學が規範經濟學に移らうとするのである。正價論の如きは此傾向を示す代表的な例である。之までの樣に、價格は如何にして定まるかの代りに、價格を如何にして定むべきかゞ問題となるのである。

正價論は現代のドイツに於ては我國に於けるよりも遙に隆盛であり、此方面の研究は種々の著書や論文になつて幾つか發表されて居る。其內の或ものは既に我國にいち早く紹介されて居る樣である。今玆に紹介しようとする正價論は、ブーフホルツ氏の學位論文と見られる體裁のもので、頁數にして七十數頁の小冊子である。著作の年代は一九三六・七年頃と思はれ、別に新刊に屬するものではないが、近時我が國に於ける洋書入手難を思ひ、簡潔にし

て要を得たる點を賞つて、敢えて世に紹介しようと思ふ。

全體の結構は、先づ最初に正價論の意義を論じ、次に正價論の學說史を述べて現代ドイツの正價論に及び、最後の一節は結論として正價の定義を下して居る。

原著書は、正義の理念がいつの時代に於ても聲高く叫ばれて居るにも拘らず、時代の變遷と共に其內容を常に異にすることを指摘する。が、然かも猶ほ正義の念は人々の內心に潛む最も有力なる道德心であつて、總ての人間の行爲は道德の規範の支配下に在ると見られる。ブールホルツは現代の價格の正義とは、どういふ內容、どういふ意味を持つて居るかを明にしようとするのである。

その爲に彼は先づ正價論の歷史から初めて、加特力敎の倫理の支配する中世の正價論に筆を起す。此時代に於ては、經濟は勿論宗敎の支配を受けて居つた。人間は神の子、兄弟キリストに近附くことを以て處世上の第一の道德と考へ、人々は敎會の戒律を實生活のあらゆる方面に實現することを念じて居つたのである。此時代に於て代表的な意見は敎父アウグスチヌスやスコラ哲學の代表的學者トーマス・フォン・アクイノに依つて示される。敎父學者達の意見は主としてプラトーンの影響を受けて居る。プラトーンは正義の名の下に物價、殊に生活必要品の價格の公定を要求し、物の「眞實の」價値に從つて價格を定むべしと說いてゐるのである。從つて商業者が最大の利益を得んとする努力の如きは當然非難される。スコラ哲學者アクイノの聖者トーマスは寧ろアリストテレスの影響を受けて居る。アリストテレスは交換に際しては等しき價値と等しき價値が交換されねばならぬといふことを說いた最初の學者である。但し此「等價」の意味の中に果して勞働と費用が含まれて居つたかどうかは問題である。聖トーマスは「正義の行爲は各人に各自のものを與へることに在り」と說いたので有名である。此意味に從ひ、經濟生活に於て正價とは、給付と反對給付とが相應する時に成立する。相應するといふこと、等價といふことは、如何なる意味を持つかといふに、著者は、それ〴〵の交換の結果が當時の「身分相應の生活」を保證するに足り、經濟生活を妨げなく續けさせて行くことのできるものであることを標準として居ると判斷する。

併し價格の正義標準をば、「身分」に應じた生活の標準に求めたり等しき「內在的價値」に求めても、それは實際上數學的に正確な標準とはならない。寧ろ價格の問題を價値の問題に移して、反つて理解を困難にしてしまつた觀があるのである。

プーフホルツは中世の宗敎的價格觀が、現代に至るまで全然姿を沒しきつて居らぬと述べ、聖トーマス以後の發展を幾人かの學者を擧げつゝ略述する。即ちスコラ學者としてダンス・スコツス（Duns Scotus）から現代の全體主義哲學を說く經濟學者シュパン（Spann）に至る間に、ペシュ（Pesch）。アダム・ミュラー（A. Müller）ネルーブロイニング（Nell-Breuning）等があげられる。

十八世紀に至つて自由主義—自然主義の經濟觀が支配する。之に依れば、神に對する信仰は失はれないけれども、神に對する解釋が全く中世と異る。神によつて創られたる自然秩序は、自働的に永遠の自然法則に依つて動いてゆく。人間は敎會の命令で活動する必要はない。"Laisser faire, laisser passer, le monde va de lui-même!" 正價とは自由なる市場經濟に於て形成される自然價格である。

英國の古典學派の經濟思想に於ては、フィジオクラートに在つた樣な神と自然的秩序に對する一種の神秘的信仰は薄れてゆく。此思想に在つては、最早や價格の正義は問題にならない。經濟現象は自然法則的な機械的市場機構に依つて定められ、人爲的に永く左右し得ざる所の自然的價格が一定すると古典學派の人々は考へる。自然的價格

は彼等に依れば生産費に依つて定められる價格に外ならぬ。蓋し價格は總て生産費用を離れて永く安定し得ないからである。生産費に一致する價格こそは彼等の考へる正價であつた。此自然的價格は、自由競爭と完全なる契約の自由の下に於てのみ成立する。彼等に在つては此二つの條件は正價を保證する必要條件であつた。此點は、價格を主觀的に說明しようと企てたウィーン學派に在つても變りはない。

以上の宗教的並に自由經濟的正價論に對立して、ブーフホルツは政治的正價論を擧げる。マーカンチリストの思想、フィヒテからカント、ヘーゲル、アーレンス等の自然的思想を指していふ社會的合理主義と名付けられる思想（ゾムバルトの說）並びに現代ドイツの國民社會主義の思想の三つが之に屬する。

重商主義思想の方面に於ける正價論の代表者として、著者はゾンネンフェルス（Sonnenfels: Grundsätze der Polizey, Handlung und Finanz, 5 Aufl. 1789）とスチ（v. Justi: Die Grundfeste zu der Macht und Glückseeligkeit der Staaten; oder Vorablung der gesanden Polizey-Wissenschaft Bd. 1. 1760）等の官房經濟學者を引用して居る。此時代の正價論の特徵は、當時獨占的支配力を强くして居つた組合（Zunft）に對する抗議である。國家は、組合の獨善的價格決定に對して取締りを嚴しくし、國民の生活手段について適正なる「中庸」價格を定めなければならぬとするのである。正當なる「中庸」價格とは個人の利益と國家的全體の利益を調和滿足せしめるものでなければならぬ。

フィヒテの經濟思想の中心は、各人に分に應じた生活を保證するといふことであつて、人々は其範圍內に於て正當なる代價を取得し、國家は又人々に之を保證する正當なる價格を定める義務があると考へられる。斯かる狀態が實現すれば、各人は正當なる所得を得て、互に何等他人の犧牲に於て富むを得ないことになるのである。

フィヒテの此考へ方は、百年後に於てグスタープ、ルーラント（Justaf Ruhland）に依つて受繼がれたと著者は見る。（ルーラントとは、最近ナチスが稱揚おかざる學者である。專ら第一次の世界大戰前に活動し一九一四年逝つた。現國務大臣ダレーは彼の舊著を一九三三年再版するに當り序文を記し、自由主義の最盛時に、科學的に之を克服した爲め反つて自由主義の爲に無視されてしまつた偉大なる經濟學者ルーラントの主著を玆に複刻して江湖に廣めると述べた）。彼に在つても、正義の價格が人間の理性と國民全體の福祉といふ立場から要求せられた。

自由主義思想を完全に克服し、自由競爭の正義を否定したものはナチスが初めてであると著者はいふ。ナチスの精神によれば、國民全體に必要なるものは正しく、之に取つて妨げとなるものは不正なのである。而して何が國民の爲に必要かは國家が定める。價格の本質及び正義の規模は目的—手段の立場からのみ理解することができる。目的の決定は政治の範圍に屬し、經濟は總て政治目的達成の爲に營まれる。價格の正義は政治的に定まる。

ブーフホルツは此場合ナチスの政治思想が決して個人的恣意に依つて定まるものでなく國民經濟上及び政治思想上の條件を無視し得ないといふことを注意することを忘れない。又ナチス國家が決してドグマに固定したものでなく、民族的思想の爲に各種の變化した手段が採用されることを特に指摘する。彼は經濟大臣フンケ（Hermann Funke）の言葉を引用する。即ち曰く

「國民社會主義の經濟政策は觀念的には、「正價」といふものを考へれば根本的に定められる。正價は之を實現するに當つて全く一方的且つ理論的な固定性とを備へず、寧ろ國民經濟的構造に適應する餘裕の廣さが充分に在り、又同時にあらゆる經濟政策上の手段の時代性といふものをよく認識して居るのである」と。

正價は、ナチスの思想に於て斯くの如く觀念的に明瞭に定義を下されて居つても、實際上の問題として之を見る

ならば、頗る意見の相違があるのである。

著者は此意見の相違の理由を、政治的價格の目的の相違に在ると考へる。著者は二十三箇條の經濟政策上の目的を羅列し、之の内の何れかに依つて正價の根據を明にしようとするのである。

斯くの如くしてブーフホルツの正價の定義は次の樣になる。

「若し或る價格が國家の定めた政治目的の達成、國策上の任務の遂行を保證し而してドイツ國民の全體性に役立つならば、それは正價なのである」と。

此意味の正價は必ずしも自由競爭、價格や需要供給の力の作用する價格を否定するとは限らない。市場に形成される價格が全體の利益に貢獻するものであるならば、此價格も亦正價であるといへるのである。國民が全部「公益は私益に優先す」といふ道德に從つて自發的に行動する樣になれば、最早や國家のやかましい規律や價格干渉がなくても濟むようになるであらう。

が併しそれまでは、國家は國策の遂行上價格形成に干渉し、正價の成立に努めなければならぬ。其方法としてブーフホルツは次の樣な種類を列擧する。

一、國家は自由市場の價格形成に影響を與へる。

二、國家は自由市場の價格形成を停止する。第二の場合は次の樣に區別される。

A、國家は標準價格を指定する、又は

B、最高價格を定める、又は

C、最低價格を定める、又は

D、固定價格を定める

此等の價格公定法は當然其目的に應じて適當に採用されなければならない。

ブーフホルツは、價格公定の最底の限界が「政治的」限界消費者の需要即ち國民全體の爲から見て充足されねばならぬ最少必要限度の需要にあり、其最高限度が生產者の認める生產費用に僅少の適正利潤を加へたる程度にあると考へて居る。併し生產費用といふものを限界の標準に提出する時、混亂が起る。蓋し生產費用は元來企業により又時期により實に千差萬別だからである。或學者は生產費を規準にして價格を公定するに絶望を感じて「賢者の石」を探す無益な努力に例へるのである。著者自らは、決して絶望しない。紙上の議論に依つては標準的生產費を計算することが出來ぬとしても、實際問題に就て之を解決することができると力んで居る。机上論を爲す限り「正價とは正に計算し得ざるもの〻計算である」と。